

本学における総合看護学実習 I に対する学生評価と今後の課題

—実習満足度アンケートの分析から—

三宅依子 岡本真優 秦朝子 盛永美保 宮松直美

滋賀医科大学医学部看護学科臨床看護学講座

本学看護学科の総合看護学実習 I は、病院内の諸部門や保健医療チームの機能と看護の役割を理解することを目的とし、3 年次領域別看護学実習前に履修することになっている。本調査は、総合看護学実習 I に対する学生の満足度の把握と実習方法の評価を目的として実施された。実習終了後に行った学生へのアンケート調査の結果、実習目標の到達度は良好で、領域別実習に役立つという評価が得られた。しかし、部門別にみると、実習時に患者が不在で担当者の説明のみに終わった場合等では満足度がやや低く、今後さらに内容や方法の検討を行う必要性が示唆された。

キーワード：看護学実習、学生評価、満足度、チーム医療、専門看護

I. はじめに

本学では3年次後期より各領域の臨地実習が始まるが、その前段階として平成18年度より総合看護学実習 I が実施されている。臨地実習は、臨床での看護や治療の実際を知ることで知識や技術を獲得するとともに、患者心理に触れる重要な機会である¹⁾。その臨地実習における患者理解をより深めるためには、総合看護学実習 I において患者に必要な種々の専門領域での看護介入方法について学び、保健医療チームの関わりや看護の役割に触れることが非常に重要である。

効果的な実習を行うためには、看護の基本技術・能力に関する学習だけでなく、早期に看護の専門性に触れる機会を持つことが大切である。特に、専門・認定看護師の活動に触れ、専門技術習得に対する動機付けを行うことが重要と考えられる。看護の専門性の点に関して見ると、平成18年10~11月現在の全国の専門看護師登録者数および認定看護師登録者数はそれぞれ186名、2,486名であり²⁾、滋賀県内の登録者数はそれぞれ3名、40名である³⁾。そのうち本学附病院には専門看護師が2名、認定看護師15名が所属しており⁴⁾、学生は多くの専門・認定看護師と関わる機会を有している。そのため、本実習においても各専門領域での専門・認定看護師の専門的看護活動の実践を学ぶことができるよう実習部門を考慮した。

今回、2週間にわたり本学附属病院において各部門での実習を行った後、実習に対する満足度と目標達成度に関するアンケート調査を実施し、今後の課題を検討した。

II. 目的

総合看護学実習 I における学生の満足度と実習方法等に対する評価を把握し、今後の実習内容について検討す

ることを目的とした。

III. 総合看護学実習 I の概要

総合看護学実習 I は3年次配当の90時間・2単位の教科であり、その目的と到達目標を表1に示した。1グループ6~7名の10グループで、本学医学部附属病院の13部門(表2)においてローテーションにより実習を行った。感染管理チーム、栄養サポートチーム(Nutrition support team; NST)、創傷・オストミー・失禁看護(Wound ostomy and continence; WOC)については、活動の実際を院内で学ぶだけでなく、学内において各認定看護師による特別講義を行うことで、その活動・役割をさらに学ぶ機会とした。適宜学内実習時間を設け、事前学習や実習後のまとめ、課題の作成や技術習得に取り組めるようにした。また、教員同席のカンファレンス時間を設けることにより、グループ内で学びを共有し深める機会とすることはもちろん、活発で効果的な能動的カンファレンスの持ち方を習得する機会となるよう計画した。その他、実習期間中は成人看護学演習室にて、バイタルサイン測定、清拭、洗髪等の技術演習を自由に行えるようにした。

各部門においては、医師・看護師(専門・認定看護師を含む)を始めとし、薬剤師・専門技師等のスタッフが、役割・機能の実際についての説明および見学、実習を支援する形とした。実習に際しては、患者のプライバシーに十分配慮した上で、可能な限り実際に患者と接することでその思いの理解や必要とされるケアの判断あるいは実施が行えるよう考慮した。

実習オリエンテーションでは、各部門における目的と目標、方法、注意点を説明し、十分に事前学習した上で実習に臨み理解を深めるよう伝え、実習を開始した。

表1 総合看護学実習Ⅰの目的と到達目標

<p>実習目的: 対象に必要な種々の専門領域での看護介入方法について学び、健康障害から回復に向けての過程における保健医療チームのかかわりと看護の役割を理解する</p> <p>到達目標: 1. 各専門分野の役割・機能について述べるができる 2. 各部門での看護介入方法について理解し実施できる 3. 保健医療チームの役割・機能について述べるができる 4. 保健医療チームでの看護師の役割・視点を述べるができる 5. 健康障害から回復に至る過程における患者心理について考えることができる</p>

表2 各実習部門名

<p>チーム医療: NST回診、褥創回診、 緩和ケアミーティング 中央診療部: 放射線部・光学診療部、 透析部、 リハビリテーション部 外来診療部: 内科外来、化学療法部 手術部・中央材料部・集中治療室・救急部 継続看護室 栄養治療部 薬剤部</p>

実習の最後にはグループ毎に学びをまとめ発表し、学年全体として学びを振り返り、臨地実習へ向けての課題を再確認する機会とした。実習評価は、出席状況や実習態度に加えて、日々の実習記録や指導ツール作成(栄養治療部・化学療法部)、各部門での学習・実習内容の整理とした。

IV. 方法

1. 調査対象者および調査時期と回収方法

平成18年度総合看護学実習Ⅰを履修した本学3年生63名を対象とし、実習終了後の平成18年9月に調査を実施した。実習終了時に自己記入式の調査票を一斉に配布し、回答を依頼した。回答後は回収箱に各自投函してもらうこととした。

2. 調査項目

評価内容は、各部門における①実習時間の妥当性、②事前学習の程度、③総合評価については、それぞれに5段階評価(「短い」から「長い」、「していない」から「充分」、「不満」から「満足」)を求め、③についてはその理由を自由記載するものとした。加えて、実習目標の各項目(5項目)達成度を「できない」から「できる」の4段階で、また、2週間を振り返って、①臨地実習に役立つか、②これまでの授業内容が活かされたか、③来年度も必要か、について「全く思わない」から「そう思う」の4段階で評価した。

3. 分析方法

5段階・4段階評価の項目については単純集計を行い、自由記載の回答は記述内容により分類・整理を行った。

4. 倫理的配慮

アンケート用紙配布の際に調査の趣旨を説明し、調査への協力は自由意志であること、また調査への協力の有無によって成績に何ら影響がないこと、調査は無記名で行われることを説明し、調査票の提出を持って同意を得たこととした。

V. 結果

1. 回収率

調査対象者63名中62名から回答が得られた(回収率98.4%)。

2. 各部門における実習時間の妥当性

全体の実習時間としては、「適当」が83.9%を占めた。部門別には、「適当」との回答が多かったのは、特別講義と継続看護室で、それぞれ93.0%、85.7%であった。また、「適当」から「やや短い」が多かったのが手術部・中央材料部と集中治療室・救急部、薬剤部であり、「適当」から「やや長い」が外来だった。さらに、「長い」「やや長い」という回答が多かったのは、チーム医療、中央診療部、栄養治療部、技術演習であった(図1)。

3. 各部門における事前学習の程度

全体としては「やや不足」が51.6%とほぼ半数であり、「ほぼできた」は33.9%であった。部門別に見ると、「充分」「ほぼできた」のは継続看護室(71.4%)、技術演習(62.5%)、チーム医療(50.0%)であった。また、「やや不足」ながらも「ほぼできた」割合が「不足」の割合を超えたのは、外来、手術部・中央材料部、集中治療室・救急部、中央診療部、栄養治療部であり、薬剤部と特別講義では「やや不足」「不足」「していない」を合わせた割合が70%を越えた(図2)。

4. 各部門における総合評価

全体として、「満足」「やや満足」を合わせると82.0%に上った。各部門において同評価が高かったのは、継続看護室(89.2%)、薬剤部(87.7%)、手術部・中央材料部と集中治療室・救急部(84.7%)、特別講義(76.9%)、外来(64.8%)であった。「やや満足」「どちらでもない」「やや不満」で評価がほぼ同等であったのは、チーム医療、中央診療部であった。また、「どちらでもない」「やや不満」「不満」であったのは、技術演習(74.2%)であった(図3)。

自由記載の意見として、「看護師の役割が分かった」「(各部門における看護師以外のスタッフの)実際を見ることで役割が分かった」「(専門スタッフと)看護師との連携が学べた」「実際に患者と関われ気持ちを考えることができた」「説明が分かりやすかった」「チーム医療の必要性を改めて感じた」などが肯定的意見として述べられた。一方、「患者と関われなかった」「患者がおらず検査の実際を見られなかった」「スタッフが忙しかった」「説明だけだった」「見ているだけだった」などの意見もあげられた。

5. 到達目標の達成

総合看護学実習 I の到達目標である 5 項目において「できる」「ほぼできる」と答えた割合が高かったのは、到達目標 1、4、3(表 1 参照)の順に 98.4%、93.5%、90.2%であった。到達目標 2 と 5 については、「できる」「ほぼできる」が 9 割に満たず、「ややできない」と回答した割合が「できる」を上回った(図 4)。

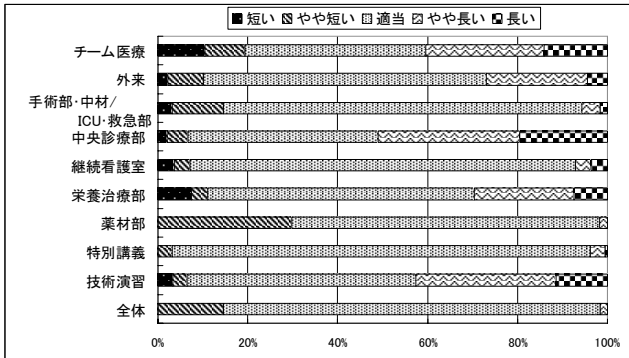


図 1 実習時間の妥当性

6. 実習全体の振り返り

図 5 に示す通り、「領域別実習に役立つか」に関して「そう思う」と答えたものは 77%で、「来年度も後輩のためにこの実習が必要か」に関しては 80%であった。両者共に「少しそう思う」を含めると 100%に至った。「これまでの授業内容が生かされたか」については、「そう思う」が 34%、「少しそう思う」が 59%、「あまり思わない」が 7%であった。

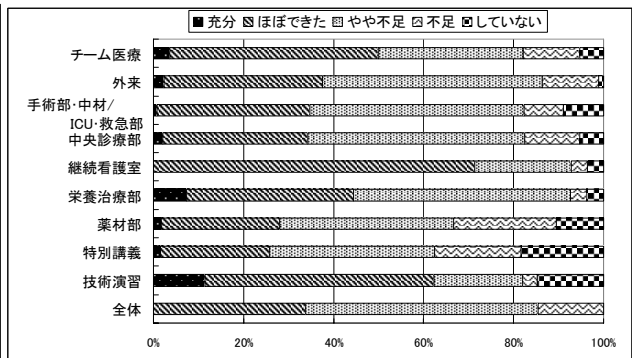


図 2 事前学習の程度

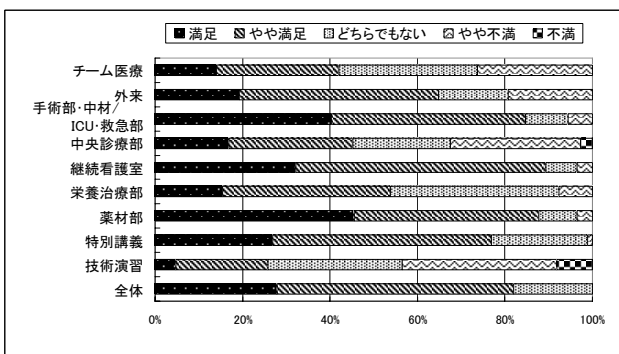


図 3 各部門の総合評価

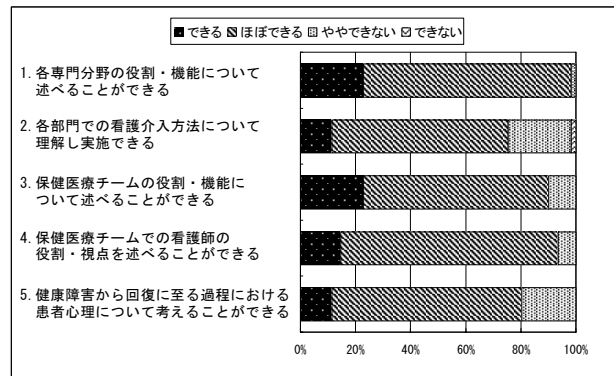


図 4 実習目標の到達度

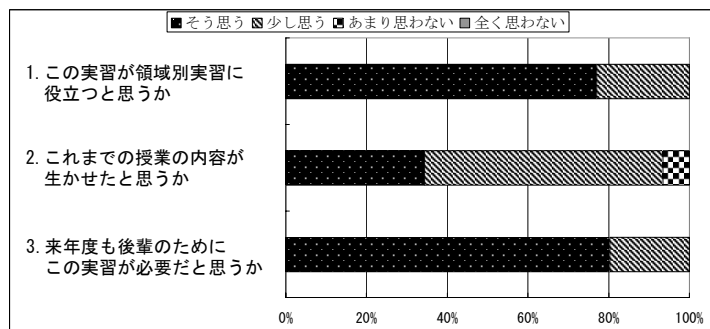


図 5 実習の振り返り

VI. 考察

本調査の結果から、総合看護学実習 I における学生の全体評価は良好であり、内容自体に興味を持てたことに加え、領域別実習へつながるものとして、その内容に学生は概ね満足していることが示された。

特に、病棟から患者を送り出すため内容を理解して

おく必要がある部門として中央診療部(リハビリテーション部、中央放射線部、透析部)を、また入院患者に関わる専門分野としてチーム医療(NST、緩和ケア、褥創)を選んだが、時間がやや長く、総合評価として「(満足・不満足の)どちらでもない」とする意見が多い傾向にあった。これには、実習中の患者の有無が大きく影響していると

考えられた。実習時に該当患者がおらず説明のみに終わった場合、その実際を体験できなかったことからやや満足度が低い傾向にあったと思われる。また、到達目標の達成度については概ね良好であったものの、各部門における看護介入方法の理解(到達目標 2)や患者心理について考えること(到達目標 5)に関しては他よりやや達成度が低かったことについても同様に、患者不在が一因と考えられた。実際に、満足度が高かった部門の理由として自由記載で上げられていたのは、患者と触れ合えたこと、スタッフが患者と関わる場面を見ることができたことであり、こうした実体験をもとにそれぞれの専門スタッフの役割や重要性を認識していることが示された。

事前学習については、全体として「やや不足」しているものが多かった。今後は、事前に資料を配布する、あるいは関連する講義内容を再認識させるなどで学習点をより明確にする必要があると考えられた。特に薬剤部では「不足」「していない」割合が高かったが、これは「ほぼできた」との回答が多かった他部門に比べて薬剤部は看護師が関わる部門であるという学生の認識が低かったためかもしれない。しかし、管理の実際や機能、看護師としての役割や視点、調剤の実施を薬剤部実習より学ぶことができ、総合評価としては満足度が最も高かった。したがって、臨地実習や就職後にその実際を体験する機会が少ない部門で実習を行うことは重要であり、また学生の事前学習課題として教員からの指示を適切に行うことで総合看護学実習での貴重な体験を有効に利用できるよう配慮する必要があると考えられた。

感染管理などの専門分野について、特にNST、WOCに関しては院内における活動の実際に行き添うすることに加えて、学内において各認定看護師による特別講義を実習期間中に受けることで、その役割の理解と活動の実際を結びつけ、より深く学ぶことができたため満足度が高く有効であったと考えられた。

領域別実習へ向けたベッドサイドでの基本援助技術復習の機会と考え、学内演習時間を設けたが、事前学習は十分にできていたにもかかわらず満足度が低かった。これは、人員や物品の問題があり十分に指導できなかったことが挙げられる。看護行為、看護技術については既習であったが、細かな技術が確実にできるよ

うにするためには具体的な動作を分かりやすく示さなければならぬため⁵⁾、今後は改善が必要である。しかし、実習環境の問題だけでなく、達成すべき学習目標を学生自身が十分に認識できていなかったことも一因と考えられ、これについては患者への声掛けや配慮ができるようにイメージを持つなどの具体的目標を伝える、実際の症例を提示してシミュレーションさせるなどの工夫が重要だと思われた。

VII. まとめ

全体的評価として、本学における総合看護学実習 I は各部門で看護師・薬剤師や専門技師等のスタッフ役割の実際に触れることにより、その機能や重要性を学び、患者心理を考え、病棟における看護の役割を理解する機会となる満足度の高い実習であったといえる。臨地実習における学生の学習意欲は、患者との関係を中心に、指導者、看護師、医師およびその他の医療スタッフなどとの関係性に大きく左右されるため⁶⁾、領域別実習直前に各関係部門での実習を行うことは意義のあることだと考える。今後はさらに、学生による直接的なケアの時間を増やすとともに、スタッフと患者と関わりから学ぶことができるよう、実習時間や人員配置に配慮しながら、積極的な学習が行える環境を整えることが重要である。

文献

- 1) 藤岡完治・堀喜久子：看護教育講座 3 看護教育の方法. 110-113, 医学書院, 2002
- 2) 日本看護協会ホームページ:認定看護師数. 2007-1-10 <http://www.nurse.or.jp/nursing/qualification/nintei/pdf/2006cengoukaku.pdf>
- 3) 日本看護協会ホームページ:専門看護師数. 2007-1-10 <http://www.nurse.or.jp/nursing/qualification/semmon/touroku.html>
- 4) 滋賀医科大学附属病院ホームページ：看護部. 2007-1-10 <http://www.shiga-med.ac.jp/~hq nurse/>
- 5) 田島桂子：看護実践能力育成に向けた教育の基礎 第2版. 191, 医学書院, 2004
- 6) 杉森みど里：看護教育学. 150-151, 医学書院, 1994